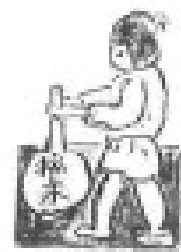


酒屋のはなし



「広吉、広吉」

昨年の暮、父を失いてんやわんやで年を越し、あす一月十六日は蔵入りという晩、うとうとした広吉の耳に父の声が聞えて来ました。「ハッ」として目をあけてみると旅支度をした父が立っていて「成田山のご開帳がはじまるのでその立派なお祭りをお前にみせてやりたいからすぐ旅支度をしなさい」といいます。わからぬまま父と共に夜道を歩いて気がつくとな成田でした。大勢の参詣の人々にもまれな



がらお厨子（仏像を安置するところ）の前にすわり、不動様の尊像を拜したとたん、広吉は鋭い眼光に目がくらみ、全身がふるえ体が動かなくなっていました。うめき声をあげたらしくそばにいた妻さきの声で目覚めた広吉は、すぐ番頭をつれ成田山へ詣でました。それから酒づくりに一層はげみしましたので清酒「稲泉」の名はますますひろがっていきました。

「だんな、仕込んだ酒がくさってやんす。」

番頭が血相をかえて酒蔵から轆場へかけこんできました。この年はいつもより多く仕込みましたからそれが駄目にな

ると破産です。みんな繰出で「火入れ」をし加熱殺菌をしましたが樽の中は濁ったままでした。

もう成田山におすがりするほかないと思った広吉は般若心經を唱えながら鐘撞にうたれる二十一日間の荒行をし、清願の日不動様のお姿を拝し喜びにふるえっていると羽生の家から、「酒はきれいに澄んだ」という知らせがとどきました。

それ以来広吉は成田山のお札を胸に入れ常に不動様の御加護を感謝していたそうです。

